

「水辺に人が集まるまちづくり」

NPO法人 新町川を守る会 理事長 中村 英雄
文責 副理事長 新居 直

はじめ

私たちの活動拠点徳島市は、吉野川とその支流が
つくり育てた人口26万人余の県都です。地方の中核
的都市として、産業をはじめ、政治・経済・文化・
教育・情報といったさまざまな面において高い集積
があります。気候は温暖で物産は豊かです。四国一
の大河・吉野川をはじめ、市内を縦横に流れる大小
の川と、万葉集にも詠まれた優美な眉山の緑は住む
人に安らぎを与え、訪れる人を癒してくれます。ま



吉野川から眉山を望む

た、阿波踊り・人形浄瑠璃・藍染・阿波しじら・木
工製品・すだちなど、徳島の風土と歴史が育んだ個
性的な文化を有しています。街は、天正年間に蜂須
賀家政が阿波に入国し城郭を築いたのが始まりで、
蜂須賀14代の治世のもと、阿波の政治・経済の中心
として栄えました。明治22年に市制が施行された時
は全国第十位の都市でした。

河川浄化への取り組み

徳島市内には、1級河川26、2級河川7、準用河
川3及び普通河川102の、合わせて138の河川が流れ
ている網状河川に囲まれた水の都です。しかし、昭
和36年9月の第二室戸台風の災害復旧事業で市内の
ほぼ全域に渡って高潮対応の特殊堤防のコンクリー
トで覆われたパラペット護岸になり、川を人々から
遠ざけてしまいました。その後の経済成長の中で、
徳島市への人口、産業の集中が行われ、工場排水の
垂れ流し、生活雑排水の流入により新町川周辺にお
いてもメタンガスが発生する程に水質が悪化し、人
々は川に背を向けて暮らしていました。その後昭和
46年から、国土交通省を始めとして県や市が浄化対
策や護岸・公園事業を行ったため河川環境はやや改
善されたものの、依然川には大量のゴミが浮いたま
まの状態でした。



当時の川の「紙芝居」

こうした現状に対して、このままでは自分たちの

住む街が永久に綺麗にならないとの危機感から、「自分たちの汚した川は自分達の手で再生しよう」と市民の手で愛される美しい川の再生を目的に、平成2年3月に有志10名で「新町川を守る会」を設立し、月2回の船による河川清掃と、田宮川堤防の修景作業から取り掛かりました。その後河川清掃はもちろん



田宮川の紫陽花と遊覧船

んのこと、河川環境啓発無料遊覧船の運航やラブリバーイベント活動を通して市民に河川に関心を寄せてもらい、人々や魚を少しずつ川に呼び戻し、網状河川に囲まれた水都徳島の再生を目指して、現在も活動をすすめています。今では、毎月2回行っているボートでの川の清掃には、会のメンバーだけでなく、企業や学校、官庁からも参加してもらえるようになりました。

市民みんなとの連携

中心部の環濠河川は、藩政時代には徳島城の外堀、運河として利用され、古くから街づくりに深く関わってきました。現在では、この歴史的な背景のもとに様々な河畔整備が実施されています。ひょうたん

島を取り囲む川は整備区間毎に管理者が異なっており、景観や利用面からは統一感の無いものになりがちですが、県と市と民の連携がうまく行われ違和感の無い河川空間がつくられています。我々の活動拠点である「新町川水際公園」は、水辺と街角コミュニティをテーマに、川・街・公園が一体となって整備され、噴水・親水のある空間であり、光を生かし街のナイトライフを彩る広場等の機能を備えた公園として、平成元年に完成しました。その後も河畔プロムナード整備が続けられ、平成17年に完成しました。公園部は公園区域、河川区域を利用した水辺の散策路として、川側のボラード上部は安全・安心の光として足下照度を確保し、壁面には、青色LEDにより夜間でも利用者に優しい配慮がされています。水際公園対岸の「しんまちボードウォーク」は



にぎわいのボードウォーク

地元の商店街振興組合が整備しました。

私たちが運航している遊覧船も年々利用者数が増え、平成13年には、徳島市が堤天より堤外側の栈橋に降りるために車椅子用のエレベーターの設置をしました。川の中にエレベーターがあるのは日本中を



障害者用エレベーター

探しても新町川だけではないでしょうか。平成22年の4月には、より多くの障害者に対応するため、遊覧船棧橋までスロープが設置されました。また、平成24年4月には河川管理者の理解を得、利用者の利便性を図るため河川内に40mの棧橋を新設しました。この棧橋は遊覧船の利用だけでなく、シンポジウム・結婚式・懇親会等色々な利用がなされて街



新しい棧橋で結婚式

角を活性化しています。これらの環境整備が整った事により、大勢の人々が安らぎや憩いを求めて、再び川に集まってくるようになってきました。

市民に河川環境改善を訴える無料遊覧船には、年間5万人を超える乗船客があります。老人ホームや

幼稚園、小学生達も団体で来てくれます。様々な障害を持った方々も五感で川を感じるのか、遊覧を終わった人たちの顔はとても穏やかで、明るい表情をしています。人出の多い時には2時間を越す待ち時間の時もあり、乗船前には待ちくたびれて険しい顔の人たちも、周遊後は「ありがとうございました」「お世話になりました」と、笑顔で感謝の言葉をかけてくれます。月2回行っている船からの清掃活動時を見た遊覧船の利用者たちは、目の前でたくさんの浮遊ゴミを掃除している様子を見て感激してくれ、ゴミを捨てない、川を汚さない気持ちになって帰られます。それでも毎月回収するゴミは、4トン車2台分くらいあります。当初に比べると格段に少なくなりましたが、それでもやめるわけにはいきません。最近では、最終処分費用を河川管理者が見てくれる様になりました。昨年度は、行政と協働で川普請事業を行い化粧張りの青石の補修事業を市民参加で行いました。昨年12月に水際公園一帯は「河川特区」に認定され、水辺で飲食物の販売も可能になりました。



市民参加で護岸補修

水辺から広がるまちづくり

平成20年度には「地方の元気再生事業」の委託を受け、流域の住民や县市町を巻き込んで、河川文化の最盛期であった明治から昭和初期の徳島・鳴門間の巡航船航路を復活し、地域再生事業に取り組んでいます。この事業は、多様な地域団体（行政・企業・NPO・ボランティア団体）に協働してもらい、航路沿線の自治体からは撫養航路を使った色んな観光ツアーの提案、協力依頼が来るようになりました。また、川での安らぎ、憩い、癒しを市民の皆さんに味わってもらうために、他にも色々なラブリバーイベントも開催しています。毎月行っている水際コン



棧橋で水際コンサート

サートには、周知しなくても大勢の人達が癒しを求めて集まって来てくれるようになりました。やさしい川風に吹かれながら聴く素晴らしい演奏と歌声、そして少しのお酒は、川での最高の癒しの時間です。秋には、観月演奏会を棧橋で行います。月の出とともに邦楽の演奏と優美な舞いが披露されると、それを見ようと市民の皆様が集まって来て護岸に腰を掛け、あたり一面は人で覆い尽くされます。正月には新町橋の袂で寒中水泳大会も行います。河川は都市部に住む人々が憩い安らぐ唯一の空間です。

おわりに

きれいになった水辺には大勢の人々があつまり、商店や住居も水辺に顔をむけるようになってきました。今では30種類を超える魚も帰ってきて、大きな黒鯛も釣れます。親子で釣り竿を持って、ファミリー釣り大会も開催されています。私たちは、水都徳島に誇りをもって、これからも市民みんなでこの素晴らしい水辺を守り育てていきたいと思っています。